

## 滋賀県立近代美術館協議会（第46回）概要

1 開催日時：平成31年(2019年)2月7日(木) 午前10時00分～午後0時10分

2 開催場所：滋賀県大津合同庁舎7-B 会議室

### 3 出席者：

滋賀県立近代美術館協議会委員 12名

上野委員、神田委員、島委員、竹村委員、檀原委員、千速委員、十倉委員、  
中野委員、柳原委員、山田委員、吉岡委員、吉野委員 (50音順)

事務局

村田館長、木村副館長、田原文化振興課長、田村新生美術館整備室長 他5名

### 4 概要

(1) 近代美術館協議会専門部会について

(事務局) 収集審査部会およびコレクション形成部会の部会員および専門委員について事務局案を説明。

(委員) (事務局案に入っていない) 委員が部会に入ることはできるのか。

(事務局) 両部会については、当館に収集する作品について学術的観点から審査いただくために当該分野の研究者あるいは学識経験者で構成して審議いただきたいと考えている。収集状況についてはこの協議会でも報告するほか、年報等を通じて広くお知らせすることとしている。

(委員) 傍聴することはできるのか。

(事務局) 一点一点の作品の価値について忌憚のない意見をいただく場であり、非公開にしている。

(委員) 他の公立美術館あるいは国立美術館などでも大半が非公開である。どういうものを収集したかというのは広く発表しているのだから、秘密裏に進められるということではない。

(委員) 特にアール・ブリュット作品については、これからいろいろな作品を発掘したり、いろいろな見方があると思う。作品の価値を決めるなかで、多様な意見が反映できるような取組をどこかで取り入れていていただきたい。

例えば、部会のなかでの話し合いだけでなく、その前段階として何らかの形で意見を募集するなど、ワンクッションがあればよいと思う。今後の課題として一考していただければと思う。

## (2) 近代美術館事業実施状況について

### 【主な意見等】

(委員) 学校出前授業は広がってきている。子どもたちが表現するためには、まず見るということが非常に重視されるようになってきており、小学校でも高学年になると授業の中で鑑賞があり、作品を観ながらいろいろ語ることになる。小学校の担任は幅広い領域をやっているので、知識が無く足りない部分を、専門的な学芸員に助けていただくなど協力してもらえることはありがたい。

例えばびわ湖ホールでは子ども向けの音楽の催しをされているが、美術館を再開されたときには、同じように子どもたちが足を運ぶ仕掛けが大切になってくる。作品を観るだけでは高尚な感じがしてなかなか足が向きにくい面もあるが、紹介のあった「たいけんびじゅつかん」のような、観るだけではなく体験できるきっかけがあればよい。

美術館の近くの県立図書館にはたくさんの親子連れの人がいる。もう少し先まで足を運んでもらえれば美術館がある。休日に親子で美術館に来てもらうためにも、こんな体験ができるというアピールにも力を入れてもらえたらと思う。子どもが来るためには保護者の協力が大事。そのあたりの働きかけも重要。

美術館が休館する前には「滋賀の子ども秀作展」を館内のギャラリーで年に1回開催し、県内の保育園、幼稚園から高校までの子どもの作品を展示していたが、そのときは来館者がすごく増えると思う。美術館が休館した去年と今年は百貨店で開催したが、来館者が増えてお買い物のほうにも人が回るといので、喜んでいただいていた。(再開後は)美術館に戻したいと思っている。子どもの作品が展示されていると一家で行ってくれるので、そういう機会に展示作品も見てもらえるようなつながりも、もっと作っていければよいと思う。

学校出前授業を受けた子どもたちが家に帰って、保護者にも「今日こんなのを学校でやってきたよ」という話題になって、今度保護者を連れて行ってみようかといった、地道なことだが、そういうつながりをつくってあげると良いと思った。

(委員) たくさんの人に来てもらうことは、いろいろ工夫もできると思う。特に大津の瀬田の場所は、滋賀県全体から見るとなかなか人が来にくい場所だが、いろんな仕掛けがあることで来てもらえるようになるだろう。逆に言えば、今はそのチャンス。

昨年、草津でされていた「美の糸ロ-アートにどぼん！」に行かせてもらったが、近代美術館だけではなくて、たくさんグループがワークショップをしていて、回遊しながら町を歩くのが非常に楽しかった。滋賀県のいろいろな所でこのようなことをしてもらえると、近代美術館に関心を持ってもらって、また来てもらえるきっかけづくりになるだろう。その場所にも馴染んでいただくと同時に、美術や美術教育に取り組んでいる人たちともつながりを持つ。これをチャンスと捉えて、積極的に機会を作っていただきたい。

相手が何かしようとするときに(美術館が)手伝うようなスタンスで動いてもらえると良いのでは。例えば学校にも単に行きますというだけではなく、先生方が何かしようとするときにアドバイスをしたり、展示の仕方の工夫をプロ目線で「こういうふうにしてみたらいいんじゃないですか」みたいな提案をしたりできると、お互いにとってよりプラスになるのではないかと思う。

また、前回のミシガンでの展示では会場で古久保（憲満）さんが描かれたそうだが、滋賀県にはたくさん作家の方がおられるので、展覧会をするときや「たいけんびじゅつかん」でも、より作家に関わってもらい、協力してもらえれば良いと思う。

美術館が作家や学校の先生、そして子どもたちのつなぎ役的に動いてもらえれば、美術館と一緒に地域も活性化するという感じで、次に開館したときに来ていただけるお得意さんを発掘できるのではないかと感じた。

「月刊学芸員」も、私はちょうど仏教美術の回に行かせてもらったが、その時の情報で昨年の秋に甲南の櫛野寺で仏像のご開帳にも行くことができた。滋賀県にいてもまだまだ分からないこともある。「月刊学芸員」は1回だけ信楽でもされて良かったが、他はだいたいコラボしがでやっておられた。これも敢えて色々な場所でやってみて、その人たちと関わりを持って、お得意さんを発掘するつもりで動いていただくように、一步踏み出してもらえると嬉しいと思う。

（委員）「若手作家作品制作展示等地域交流事業」は面白い。これからも続けていっていただきたいと思う。私も観てきたが、長浜の黒壁の商店街にある古い建物の中で展示されていた。普通、美術作品は空調や光だとかうるさいことがあるが、街の中に展示された。そして、ここが大事だと思うが、若い作家さんに機会を与えたということだと思う。

先ほども話があったが、滋賀県には作家さんが結構いて中でも若い人が多い。ただ、彼らは展示する機会があるとしたら大阪だとか京都で、滋賀ではあまり無い。今回展示された3人の方は滋賀の関係の人で、この近くにお住まいの女性もいた。

得てして美術館で展示される作品は、既に評価が伴っていたり、実績があったり、あるいは過去の方の作品が多い。滋賀では発展途上の、評価もまだ付かない若い作家を観る機会はあまりない。実はそっちのほうが、同じ空気を吸っていて面白い人もいるわけで、そういう人たちを発掘して、こういう機会を与えるということが大事になってくると思う。それを今回されたということを非常に評価したい。

滋賀にどれだけ作家がいるのか、多いだろうというだけで、実はよく分からない。どこにどんな人がいるのかをまずは掴んでほしい。今回の事業のような取り組みをそのためのツールにする。人探しの機会になる。担当した学芸員は既に自分でそういう人たちのデータベースを作っていると聞いたので、そういった蓄積を増やして、みんなで情報共有するという形にしたらいのではないかと考えている。

長浜の展示では、作家と担当学芸員が「長浜という歴史のあるこんな場所でやりますから」と話し合っ、その結果として展示する作品ができていったということを知って、面白いと思った。既にある作品をぽんっと置くのではなくて、長浜の街と作品が関わっている。そうすると、道行く人もより関心を持つと思う。

自分が会場に行ったときも、結構人が来ていた。そこに作家さんも担当学芸員もいらっしゃって、（来場者に）積極的に話しかけていた。「これはこういう見方ができるんじゃないか」とか。作品に差し込む光の話も、ぱっと行っただけではわからない。少し時間をかけてみるとわかるので、「夕方になると、光がこっちから指してきますからそれまで待ってください」と引き留められた。そういう会話ができることが非常に大事だと思っている。

既にこれで（作家に）作品制作と制作発表の場所を与えたというサポートをしている。さらに要望としては、プラスアルファ、もう一つサポートとして、できれば制作費を少しあげてほしい。ご飯が食べられるだけのお金は難しいと思うが、ある程度のサポートも必要だと思う。アーティストはなかなかお金のことは言わないが、生活がある。それを誰が支えるかというと、市民と美術館に関わっている人たちだと思うので、それはぜひ考えて

もらいたい。

収蔵するための委員会があるが、いい作品、面白いと思った作品はできたら買い上げてほしい。これは博打だと思う。日本では収蔵したらアメリカみたいに売ることができない。そういうシステムが良いのかもどこかで考えるべきかもしれない。あるいは貸し出すときにお金を取るとか。作家さんの懐を何とかするための仕組みを、もう少し美術館のほうでも考えてほしいと思う。

それからもう一つだけ、少し気掛かりな点があって、アートにどぼん！は大変すばらしい取組だが、来年度からもできるかどうか、現場で不安な声も聞いたので、今後のことは話にくいかもしれないが、確認しておきたい。

(委員) 若いアーティストとの関係という意味で本当にいい意見をありがとうございます。作品を買う方向、あるいは少し制作費を出す。予算的には厳しい話かと思うが、休館中だからできる仕事だと思うので、学芸の方でも頑張っていたきたい。

(事務局) 若手作家作品制作展示等地域交流事業について、作家1人あたり40万円ぐらいの制作費でやってもらったが、新作で、今回はガラスということもあって、結構皆さんチャレンジングな作品にいただいたので、全員の作家がとんとんくらいであったと思う。予算的な部分も考えていきたい。

現段階の予定としては、再開館するまでできればこの事業を継続したいと思っている。それまであと2回か3回あるかと思うが、再開館をしたときには、それまで取り扱った若手作家をもう一回全員集めて、美術館の中で成果展という形ができれば。それが新作になるのか、既に紹介した作品でということになるのかまだ分からないが、企画展を一つ打ちたいと考えている。

(委員) 学芸員が9人いるということだが、それでこれだけの活動をされているのは大変だと思う。私も学校にいたが、学校連携と言っても学校個々の事情は違う。体制も担当される先生の資質も違うので、その中でこれだけのことをされているというのは驚異的だと思っている。もう少し人数を増やせないのか、あるいは、学芸員でなくても、コーディネーター的な人だったら何とかならないのかと思う。

先ほどからいろいろ、「つなぐ」話が出ていた。学校と美術館をつなぐ、あるいは地域と美術館をつなぐという話が出ていたと思うが、そのつなぐ起点に美術館がいてほしい。

去年、近江八幡のBIWAKOビエンナーレをととても面白いと思って2回行った。一緒にいた県外の方も、「こんなのやっているんだ。もっと広がればいいね」というふうにおっしゃっていた。私は今、近江八幡市展の審査にも行っているので、市の担当の方にも、ビエンナーレは本当にお一人でされているので、(その人には)キュレーターの仕事に専念してもらって、運営はもう少し近江八幡市でできませんかという話もした。そのあたり、つなぐ人が重要。BIWAKOビエンナーレはこのたび表彰もされると聞いたが、素晴らしいことをされているのに、単発で終わっている。実際は長浜も高島も信楽もされているが、単発で終わっている印象がある。それらが全部つながらないかと思う。美術の分野だけではなく、例えばイナズマロックなどは、あれだけ人が集まのだから、連携してアートをくっつけられればと思う。

私どもの書は、なかなか美術館に入れてもらえなくて残念に思っているが、一方で大衆の芸術なので人は集まる。そういうものをもっとうまく使ってもらえればと思う。先ほど美術のほうも百貨店でされているというお話もあったが、私どもも、小中高校生の書の展覧会を毎年1月に百貨店でさせていただいている。3日間だけだが、1万人近くの方、世

代を超えておじいちゃんおばあちゃんまでいらっしやる。そういうものと美術館とが連携していくと、さらに人が集まる拠点になるのではないか。

もう一つだけ。再開館したら、つなぐ役割のセンターに美術館がなってほしいと思っている。と言うのは、ミシガンの展示の話があったが、私たちはアナーバーの公立図書館が会場だった。最初、県のほうから図書館でやってくださいと言われたとき、なぜ図書館でしないといけないのかと思っていたが、実際に行くと、アナーバーの図書館はカルチャーセンターだった。我々もワークショップをしたが、図書館の地下にこの部屋の1.5倍くらいの広さの部屋が2つあって、ワークショップを同時展開できる。一方にはワークショップ用に大きなテーブルが幾つかあって、もう一方はシアターになっている。我々がワークショップをやっている隣では、子どもたちがいっぱい集まってお遊戯のようなものをやっていた。

書道はアメリカの人にはそんなになじみがないので、集まってもらえるかすごく不安だったが、ふたを開けてみれば2日間で多分300人以上の人が来てくれた。あまりにたくさん的人数できちんとカウントできないほど大わらわだったが、それは、書道が珍しいからというよりは、普段から集まる場所になっているから。アナーバーの図書館はメインのほかにあと2~3分館があるようだが、ワークショップ的なものが1カ月で100本開催されていて、月に大体1万人動員していると聞いた。本当に根っこがしっかりしている。いろいろ考えさせられて帰ってきた。図書館に入った所に黒い機材がいっぱい並んでいて、あれは何かと聞くと、照明とか音響の機材だとおっしゃる。要するにアナーバーの市内で何かイベントをやりたいかったら、図書館に場所を借りに来て、無料で貸し出している。こういう機材は無いかと聞かれて無いときは、予算で新しく購入するとおっしゃっていた。

本当に文化を支えるバックボーンに図書館がある。三日月知事もいらっしやって、非常に感銘を受けられたと聞いている。そういう役割を美術館、隣には図書館があるのだから、連動してカルチャーセンター的なことができないかなと思いつつ帰ってきた。

(委員) 休館中のいろんな活動を聞かせてもらい、館長が休館中でも美術館であるとおっしゃっていたところに「ああ、そうだな」と感じた。今は閉まっていて、開館してからの集客というところに目がいきがちかもしれないが、育てる美術館として、長い目で美術館を運営していただきたいと思っている。

それは、先ほど紹介もあったが若手の作家を育てるという観点での発表の機会の提供や工場の貸出し、あるいは、学校的な機能と言えるかもしれないが、既に実施されている月刊学芸員のような講座をカリキュラム化して、受講者が美術館の開館後に講座で得た知識や技術を活用して、先ほども話のあったコーディネーターとして地域で活動してもらえるようにしていくなどもある。また、例えば、ミュージアムショップで販売するグッズを市民が企画したり、県内の素材を使って県内で作家活動をされている方もいっぱいいらっしやるので、そういう方たちと連携して、作品をミュージアムショップに置くなどといった形もあるのではないか。

時間はかかるかも知れないが、人やものを市民の方と一緒に育てられる場所として美術館を位置付けられないかと感じた。その中に市民の方を巻き込んでいけば、足を運んでいただく機会にもなる。「単発で展覧会に来た」、「ちょっと話題になったから来た」だけではなくて、何回も通いたくなる、「小さいころに来て大きくなって来ました」とか、大人になってずっと来ているというような長い流れも、育てていっていただける美術館として、開館していただきたい。

(事務局) 先ほど「アートにどぼん！」の質問を頂いた件、来年度も継続を予定しており、

前回は草津市と連携しての開催であったが、来年度も地域で、その場所で開催することの意義や、意味を踏まえたワークショップなどを組み合わせながら開催したいと考えている。

(委員) 本当に多彩な展開をされている。学芸員というのはこの美術館も少なく、困っているのだが、そういった中でも、非常にがんばっておられると思う。一言だけ伝えておきたい。

### (3) 新生美術館整備の総括と今後の対応について

#### 【主な意見等】

(委員) 財政状況の厳しい中、このようになるのは世の中難しい状況なのでこれは仕方がないと思う。しかし、新しい建物を造れなくなるということと同時に、今までの敷地から全部を見直して、まだまだ改善できる部分はあると私は思っている。近代美術館が最初に造られたときは、高尚な建物というイメージで、前庭があったり、立派なアクセスの通路があったりという形で、割とゆったりとした敷地の使われ方をしているが、金沢 21 世紀美術館などの場合であれば非常にコンパクトな敷地の中で、建物が真ん中にある、周辺が広場のようなイメージもあるような形で、親しみやすい雰囲気の中に造られている。だが、滋賀県の場合はどちらかと言うと高尚なイメージをキープしている。

例えば、使えそうな所をもう少し取り外して、野外での美術展示とか、ビエンナーレとかトリエンナーレをされているようなときに使えるスペースを作るとか。東京のほうだと、いろいろな大きな空間の中に、映像と来館者とがシンクロするような形で、非常に近代的な美術というのかアートの取り組みをされている所もある。そういうものにも使えるような所を、一定期間、仮に使えるような大きなオープンスペースがあるとか。また、金沢 21 世紀美術館でも制作のためのスペースが美術館内にあるが、土地の中にそれほどお金はかけなくても、本体とはまた別個の付属施設的なものがあったり、周辺の公園を、美術のイベントや美術展のときに使えるような工夫などを考えていくことで、今までとは違う美術館の展開ができるのではないかというイメージを持った。

(委員) 今おっしゃっていた金沢 21 世紀美術館の制作工房的なものだが、美術館に付属しており、アーティストが滞在してときにそこで制作するようなこともできるようになっていて、そこでレクチャーなどもしている。ただ、今回の近代美術館の整備は老朽化対策を中心に展開されるので、新規の建物をあの敷地内に入れるのは相当ハードルが高いのではないかと、実際には感じる。

一方で、館内のいろんなスペースをうまく使って、そういう機能を持たせられる可能性はあると思う。また、そういう作家たちが増えてきている。今回、長浜のサーキュレーション展に参加した方たちは、多分非常に柔軟な作家たちだと思う。だから、従来の絵画、彫刻を展示するという、美術品としてありがたいものを見せていただくような場だけではなく、作家自身の意識が随分変わってきているので、そういった作家たちをうまく取り込んで、美術館あるいは公園全体をうまく使ってやるイベントが可能になれば良いのではないかと。

私のアイデアとしては、来年度は難しいかもしれないが、それ以降でも、駅から美術館までは皆さんバスで行くが、美術館に行く途中で空き店舗などがあればそこを提供してもらいイベ

ントをやって、歩いて美術館にいけるような仕掛けがあると面白い展開になるのではないか。

(委員) 基本的なことをお聞きするが、当初は現代美術や滋賀の美術、新しいアール・ブリュット、そこに仏教美術が入るという計画だったと思うが、完全に離すということによいのか。

(事務局) 3本柱と申し上げていた、近代・現代美術、アール・ブリュット、神と仏の美については引き続き3本柱を維持していく考え。ただ、それを1つの建物で表現するのかどうか、あるいは、神と仏の美については別の建物で表現するのか。そういったことは、2020年度基本計画の見直しの中で、あらためてしっかり検討していきたいと考えている。

(委員) 琵琶湖文化館にその機能をもう一度戻すというような考え方か。

(事務局) 琵琶湖文化館はやはり老朽化しているので、その立地場所について、あらためて今の琵琶湖文化館の建物を使うのは難しいだろうと考えている。そのあたりも一部含めて、これから検討していくことになると思う。

(委員) 今の話を聞いて本当に根底的なことをお聞きしたいが、このようなことになって、私自身も考え直しているが、新生美術館というのは一体何だったのか、そのコンセプトは何だったのかが分からなくなったと思う。

というのは、今回、新生美術館基本計画の見直しと書かれているが、新生美術館という考え方の実現の仕方の基本計画を見直す。根本のところの新生美術館とは一体何なのかという、美術館のあり方が十分問われていたのかがどうかがある。そこから、どういう美術館にしたほうがいいのか、美術館の役割はどうかということを考えていくという順番だったと思うが。

私もそのあたりは色々イメージがあったりしたが、仏教美術とアール・ブリュットと近代・現代美術の3本の柱、あるいは3つを1つの花束にするのだという、非常にメルヘンチックな比喻をされていたが、実はそれ自身が非常に曖昧に感じていた。一緒にすることによって何か生まれるだろうという部分こそがコンセプトだったのではないかと思うが、3つをそれぞれでちゃんと展示するというのなら、新生美術館とは一体何だったのかという気がする。

基本計画の見直し以前に、新生美術館とは何なのかという考え方の総括をするべきではないか。「美の滋賀」はいいと思うが、それを美術館で体現しようとしたのが浮いてしまった今、美術館というのは単に美術の入った入れ物になるのだろうか。そのあたりの説明が今、ものすごくしどろもどろになっている。新生美術館の考え方が、結構曖昧になっているのではないかと思う。

基本計画の見直しということは、新生美術館という名前も含めて、もうやめてしまうことも含めて考えるというのではないはず。基本計画だから。本当はもっと前に、計画というのは、構想があって、ビジョンがあって、それをどう実現していくかというところから始まるわけで、その根本のところは変えていないということによいのだろうか。変えていないとしたら、新生美術館とは一体何だという説明が改めて必要ではないかと思うが、どうだろうか。

(事務局) 新生美術館は基本計画を見ると近代美術館の機能を拡張すると書いてある。1つの建物で3つの美を表現するというのが新生美術館という考え方がされている。それが厳しくなったので、今後は新生美術館全体も含めて検討していく必要があると考えている。もちろん今おっしゃっていただいた点もしっかりと検討させていただく。

(委員) それならば、新生美術館基本計画の見直しというのは少し変な表現だと思った。もっ

と根本的に美術館のあり方自身を問い直さないと駄目なのが今の段階ではないかと思う。

(事務局) 基本計画に書いてある使命や、「美の滋賀」の拠点、こういったことは、継承していきたいと思う。ただ、施設整備計画等、これは様々な変化も出てきているので、しっかり見直す考え。

(委員) 「美の滋賀」を見直す必要はないと思う。そこの美術館への下ろし方に断層ができているのではないかということだと思う。

(委員) 限られた予算をどう使うのかというところで考えていた。結局、いま委員がおっしゃったように、私の認識では、今までの美術館活動に加えて、一つとしてアール・ブリュットについて展示を行うというところは決められたが、仏教美術についてはどうなるのかというところ。予算の点からも今はそれほどスペースの拡充も望めないということならば、先ほどからおっしゃっているように、周辺の活用の仕方や、映像を取り入れるなどの工夫も考えていく必要があるのではないか。

(委員) 以前の話では、琵琶湖文化館は閉館されるように聞いたことがあるが、結局修復して使うということか。

(事務局) 琵琶湖文化館は平成 20 年度から休館している。

(委員) 完全に閉鎖するという話が耳に入ったことがあるが、そうではなくて、何らかの形で活用されるのか。

(事務局) 活用するかどうかは、文化財保護課で今後のあり方、どうしていくかを検討しているところ。

(委員) 先の委員がおっしゃったように、一般の人も関わって、新しい考えを取り入れてやっていくのもいいかと思う。

(委員) お聞きしたいが、美術とかアートというのは、基本的には参加型というのが一番いいと思う。その点で(美術館工事費の) 47 億円というのは、枠的にはどんどん目減りしているのか。それとも、今後それ以上の予算で整備することが可能であるのか。

(事務局) 事業費については、2020 年度の基本計画の見直しの中でまた議論する予定。

(委員) 増やすことも可能なのか。

(事務局) それは現段階ではわからない。

(委員) 休館の間に色々な事業をされている。県民も参加して面白いことをされて、確かにその理想はあるので、皆さんが参加して楽しいなと思わないと創造的なものは生まれてこない。一方で、その分の予算をどんどん使っていくことで、もしも 47 億円から使い込んでいたら、最終的にもっと予算が少なくなってくるのではないか。

(事務局) 現在近代美術館で実施している事業とハードにかかる予算は別に考えていただければと思う。

(委員) 県の中で予算もっと取っていくということはできるのか。

(事務局) 総合的にどれだけの予算を費やせるかは、これから議論して基本計画をきちんと見直す中で検討するべき話。増やすことが可能とは、なかなか今は申し上げられない。

(委員) 自分としては、増やしていけるものだったら、予算をもっと増やしていただいたほうが、皆さんの希望する事業が可能であると思っている。

(委員) 美術館が休館したとき、自分のところの団体も含め、色々な団体が展覧会を開くためにあちこちの会場を押さえるのは大変で、苦勞していた。やはりもう一回、ギャラリーがみんなにとって使いでがよくて、何にでも使える、そして、できるだけ早く展覧会が開けるようになれば良いと思う。

(委員) 大学で西洋美術の授業をやっているが、授業の最初に必ず、関西で学生たちが見に行ける展覧会の紹介をする。今だったらルーブル美術館展を大阪市立美術館でやっているよとか。あるとき学生がポロッと「先生、全然滋賀県の展覧会、紹介してくれないんですね」って言われて、そういえば確かに、特別展をやる会場が現状は滋賀県内でなかなかないんだな、こういう意味でも寂しいなと実感した。

2021年には近代美術館として再開されるということだが、大学では西日本中心にいろんな所から学生さんが来るので、滋賀県にもこういう文化財があってという話をする。すると、京都、奈良は仏像がいっぱいあって宗教美術が盛んだというのが、高校時代にも何となく分かっていたが、滋賀県ってこんなにあるんだというのを、真面目な学生さんはよく言ってくださる。確かに1000年を超える造形活動の歴史がある土地なので、ぜひそれを大事にしていきたい。

もう一つ。私は今京都に住んでいるもので、まちなかを歩いていると、たくさん外国からの観光客が来ていて、この観光客がなぜ逢坂の峠を越えてこっちに来ないのかと思う。あまり美術史家の立場で言うことではないかもしれないが、観光資源としても、宗教美術の意義は非常に高いと思うので、そういった意味でも経済的にももったいないなという気持ちもしている。

地域振興の中で、文化あるいは文化資本がこれからどのように経済資本と連携していくのかという観点からも、ぜひ考えていただきたい。

(委員) 今、委員がおっしゃったように、国のほうでも文化と観光、もっと具体的に言えば、美術と観光をどう結び付けるかというような事業展開を模索しているので、その辺もまた検討していただければ。確かに滋賀は、京都以上に文化圏と言いうか、仏像一つ取ってもすごい存在感がある地域であるので、その辺はもうちょっと取り入れていただいて、新しい美術館につなげていただくのがいいなという気がする。

それと、2020年度の事業として老朽化対策の事業費に約12億円を計上されているが、これは今ある美術館を直すという考え方になるのか。そして、一応2021年にはオープンしたいというのが、当局の考えというふうに受け止めてよいのか。

(事務局) そのとおり。

(委員) 皆さん、そういうことで受け止めていただきたい。それから、整備予算だが、京都市

美術館は、市が当初予算で用意したお金が約 50 億円だったと思う。それでは落札しなかった。市はどう考えたかというとな美術館の名前を売ろうとした。結果として 100 億円以上かけた事業となった。

それと、富山県の新しい美術館がやはり当初の入札は全て不落だった。もう一つは近年建った美術館で大分の美術館がある。よくまあ建てたなと思うくらい苦労されているが、近年県立規模で建ったこの 2 つ、それと、大阪市の美術館も大変厳しい建築予算でやっている。これらの例を、建物という観点、それから運営という観点で勉強なさっても良いのではないか。

(委員) 琵琶湖文化館に収蔵されている仏像の数や必要なスペース、文化財だから特に厳しい湿度の管理がされて、セキュリティーその他が一定基準を超えないと収蔵や展示はできないだろうと思うが、そういうものに対するある程度の情報の提示も、話し合いのベースには必要なと思う。

それから、滋賀県の仏教文化という部分では、当然比叡山もあるが、湖北を中心とした観音信仰であったり、甲賀のほうでも仏教が非常に盛んな時期があり、仏像もたくさんある。多くは近代美術館に行くとしても、分館的な思想で県内でそういうものを一定まとめて収蔵と展示ができるようなことの検討もあり得るのではないかと思う。

単に美術というだけではなく、文化財の視点での予算の付け方もあるのではないか。滋賀県の美は瀬田にあるだけではなくて、県内いろんな所に分館としてのあり方もあると思うし、仏教文化の証としての、「この場所」という選定の仕方もあるのではないか。

いろいろ多方面で見直す機会というのはそんなに何度もなくて、今はちょうどそういう時期だと思うので、検討いただいて、また、地域の方々の意見も聞いていただければと思う。

(委員) 皆さん、様々な意見をありがとうございます。今日いただいた意見は、事務局で取りまとめて、今後の方針に役立てていただきたい。どうしてももう一つだけ言っておきたいという方があれば、お聞きしたい。

(委員) 老朽化対策をして 2021 年度の再開館のところまでははっきりしている。問題はその後だと思っている。もう既に 10 年失ってしまっているのもう少し工程表を示していただく必要があるのではないか。基本計画を見直して、いつそれが実際に実施されるのか、今はイメージをしっかりとっておられないと考えざるを得ない。それではまた 10 年たってしまうと思う。ぜひ基本計画見直しのときに工程表は示していただきたい。